

---

報告者名	梅屋 潔	被調査者生年	① 1935年(男)
調査者名	梅屋 潔	被調査者属性	① 八雲神社別当
補助調査者	なし		

---

#### 被調査者（主な聞き書きは話者①から）

- \* 話者② 60才代(男)、八雲神社氏子
- \* 話者③ 1937年(男)、鹿折地区宮司(鹿折八幡神社、八雲神社、御嶽神社の宮司を兼任)

#### まえがき

われわれは本プロジェクトの調査に先立ち、2012年7月13日～16日、および8月5日～9日に現地調査を実施した。「被災地学生・大学院生に対するフィールドワークと記録・保存のスキル移転」(平成24年度神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費採択事業、代表者岡田浩樹)によるものである。気仙沼文化協会および気仙沼市教育委員会には「無形文化財をになうコミュニティの形成過程にかかる研究班」調査として協力いただいた。それらの資料は本報告書にも重要な参考資料となっているが、ここでは最低限の言及にとどめる。また別のかたちで公にする予定である(事業の報告書はPDFで作成が予定されているがその他の発表媒体は未定)。なお、本調査には山形県立新庄神室産業高等学校の齋藤良治氏が同行した。

#### 明治の神社合祀令と八雲神社オサガリ

八雲神社は、いわゆる上鹿折地区(気仙沼市上東側245)に鎮座する。祭神は素戔嗚命。伝承によれば、暦応4年(1341)。(南北朝時代の北朝の元号を用いている点に注意)、刈屋源四郎なる人物が、疫病退散祈願のために尾州津島牛頭天王の分霊を勧請したものとされる。祭典日は旧暦の6月14、15日。

旧鹿折村の神社は八雲神社も含めすべて明治39年(1906)12月の明治の神社合祀令(勅令)の際に村社である鹿折八幡神社に合祀された(ただし正式な合祀手続きが書き上げなどのかたちで確認できるものとできないものがあり、現在のところ八雲神社の場合確認できていない)。上鹿折地区の住民が現在、鹿折八幡神社の氏子であるとの認識を持っており、4年に一度のトーマー(当前)の際には神輿の陸尺を担当していることもその事実を裏づける。上鹿折にも「白山(はくさん)太鼓」という打ち囃子があるが、伝承者は少なく、より有名な「中才打ち囃子」の伝承に一役買っていることが多い。鹿折八幡神社のトーマーでは、東・西中才として陸尺を担当する。上鹿折の住人は、4年に一度の鹿折八幡のオサガリにおけるトーマーのほか、毎年八雲神社(オテンノウサマ(お天王さま))のオサガリの陸尺も担当する。このことは近隣の中才でもあまり知られていない。宮司は代々羽黒修験の齋藤家(屋号は東(ひがし))が担当していたが、血脈が絶え、現在ではその系統を継承する鹿折八幡宮司が兼務している(ちなみに現在では三ノ浜(鶴ヶ浦)の御嶽神社も含め旧鹿折村全神社小祠の祭典は同宮司が兼任している)。

八雲神社のオサガリ時の御旅所(オヤド)は、鹿折八幡神社とかなり重複しているが、若干異なっている。これは慎重に分析する必要があるが、上鹿折がかつて金山で栄えたという歴史的経緯から考えると、金山の衰退に伴って商業に活路を見出すべく埋め立てられた新興地域に移住していった人々がもともとの氏神である八雲神社の神輿巡幸を望んだものではないかと推測される。

なお、2011年3月11日の東日本大震災後、上鹿折は津波の犠牲者の緊急避難場所としての役割を担ったほか、

当座の食料の供給にも重要な役割を果たした。主立った氏子たちは直接の被災はしていないものの、鹿折八幡神社オサガリ同様、オサガリの経路に当たるオヤド（とくに町場の新しい家）が深刻な津波の被害に見舞われたため、現在のところ、オサガリを再開する目途は立っていない。

### 八雲神社総代会と祭典

神社の近隣住民で構成されている。現在の構成員の人数は16名。総代会の役割は祭礼当日のみに限らず、事前にオサガリのオヤドとなっている家に案内を出したり、祭礼の前日に行われる前夜祭（後述）の運営もおこなう。また、案内することは「オツキアイ」と呼ばれている。

総代会16名の内訳であるが、「総代」の職にHS、話者①、SHの3名が就いている。HS（屋号・久保）は神社の総代長、話者①（八雲神社社務所）はベツトウ（別当）、SH（屋号・仁井屋）は氏子総代を務めている。そして世話人（世話役）が13名、宮司、事務局など5名ほどとなっている。事務局を総代や世話人が兼務することはなく、専任の人間がいるとのこと。この時点で総代会の構成人数は先の16名を超えている。総代会の打ち合わせの場は両沢会館である。

八雲神社の祭礼の前夜祭には、総代、氏子、崇敬者など、八雲神社の関係者が集まる。神事・祝詞・御祓い・直会をおこなう。直会は、鹿折八幡神社の場合は社務所や参集殿でおこなわれるが、八雲神社の場合は神社の中でおこなわれる。

### オサガリのオヤド

オヤド（いわゆる御旅所）のほとんどが個人宅であり、かつての祭祀の実情を推測すると、陸尺たちは庭などで休憩し、神官は神棚などに祈禱したと考えられる。近年では神官はその住宅にあがることはせず、陸尺もその家へと続く道路の入り口で休んでいる。注目すべきは、多くの場合にこの地域で信仰をあつめる曹洞宗の檀家の代表（護寺会）が講中をとりまとめるかたちでオヤドとなっている点である。

一般に旧家・商店・総代の家がオヤドとなっているが、近年では地域の有力者や名士が世話人を務める傾向がある。その場合、オヤドとなる家はその場所だけ提供し、世話人は地区の行政委員や自治会長が務める。オヤドとなる家（の人間）とお世話をする家（の人間）が別になっていることがある。明治時代、浪板まで巡行するようになった際にオヤドとなった家や場所から（21）の鹿折消防会館までは（18～21）、かつては塩田であり、海であった地域が埋め立てられた地域である。本浜町など街自体が比較的新しい。オヤドも駅などの公共的な場や商店が多い。世話人も行政委員や地区会長などが務めている。そして、（18）のみなどやにみられるように、地域住民の関心が相対的に薄いと言われている。

以下、オヤド宅、お世話人（屋号）、講中名の順に記載し、必要に応じて解説する。

### 八雲神社のオヤド

\*編集部注：神輿の宿にあたる部分は匿名にしてしまうと意味がなくなってしまうことから、報告者の梅屋氏が話者と相談のうえ、実名記載で掲載することとした。

1. 八雲神社（鳥居がスタート地点）。
2. 畠山家、畠山修太郎（久保：神社の総代長）、久保講中。
3. 上鹿折駅前：世話人は行政委員や自治会長が務める。
4. 昆野家、昆野有志（元茶屋：昆野氏は近辺の講中の頭、世話役を務める）、元茶屋講中。
5. 横山家、横山正義（蕨野）、蕨野講中。
6. 横山家、横山薫（川端）、川端講中。
7. 白山商店、佐藤良治（白山）、白山講中。初代は盛岡原六光房。現在の当主佐藤良治氏は15代目。代々神輿の通り道を清めるシオマキを世襲で担当している。石川県の白山神社から修験者がおとすれ、それを由来とするイエガミをもつためこの屋号となった。

8. 中央橋、津満（つま）講中。
9. 村上家、村上正次（朴木沢（ほうきざわ））、朴木沢講中。公民館の近くに神木がある。場所は村上家ではなく、家の手前の道路となる。
10. 村上家、村上克美（老ノ林）、老ノ林講中。場所は村上家の近くの道路であるが、5、6年前にオヤドとなって100年ということで家まで渡御し、休んだことがある。
11. 小野寺モーターズ、小野寺孝信（森ヶ口）、森ヶ口講中。
12. 鹿折大橋、小松毅（中山田）、山田講中。山田講中は山田家5、6件＋近隣の家で構成される。それぞれの屋号は入山田（小野寺強・入山田建設）、中山田（小松毅）、前山田（小松光雄）である。中山田は別名大家（おおい）山田と呼ばれ、本家とみなされている。実際の系譜上のつながりの有無にかかわらず、こうした同族団に付随して本家を手伝う家のことを近隣では広くシンルイと見なすことが多い。
13. 村上家、村上信一（川崎）、川崎講中。
14. 高橋家、高橋吉重、岸根崎講中。かつては小野寺吉之氏の家であったが戦前に浜区の方から越してきた高橋吉重氏の家が世話をすることになった。小野寺家への入口に当たる高橋吉重氏が務めている。高橋家が当地区に移住してきたのは比較的新しい。現在の祭礼の際に高橋氏は出てこない。
15. あぶら茶や（斎藤瑞久家）前、高倉暁、あぶら茶や講中。実際の世話は長年行政委員を務め名士でもある高倉暁氏が務めている。大船渡線を挟んだ西八幡町の西部にすむ。
16. 菊田旗染工場前、菊田栄穂、染屋講中。
17. 酒大将十文字目店前、十文字目講中。MN氏が世話役。場所は酒大将十文字目という酒屋であるが、世話役のMN氏（屋号：カクボ）は酒屋とは関係のない人物である。MN氏が世話役を務めているのは、行政委員を務めていたからではないかと考えられる。また、小学校の校長を務めた経験もあるKM氏が世話役を担当していた時期もあった。戦前は、現東八幡前の人は鹿折歩道橋付近（中みなと町）を通過して沢まで下って行き、魚やイカなどを釣っていった。現在では、東八幡前と中みなと町には国道45号線が横断し、両地区は明確に区分されているが、昔は通り道は1本だったのでコミュニティとして現在よりも一体感があった。
18. みなとや商店前、西条郁夫、みなとや講中。みなとやは鹿折駅前現在の第18共徳丸がある辺り。西条氏は2010年までお世話をしており、その後、津波の被害に遭う。震災後は場所だけ提供している。また、この地域は塩田を埋め立てて戦後に出来た新しい街のため、近所付き合いなどがなく地縁が希薄である。そのため、祭礼に対して近隣の家の関心はさほどない。
19. たかはし商店前、高橋明（カネショウ）、カネショウ講中。
20. 吾妻商店、吾妻（吾妻忠男）、吾妻講中。錦町1丁目（カネショウ講中）、浜町1丁目（吾妻講中）、本浜町1丁目（消防会館前）の3地区は、戦後埋め立てによって作られた地区で、それ以前は海上だった。そのため、戦前のオテンノウサマの巡幸の順路には組み込まれていなかった。この3地区のオヤドは、比較的新しいものである。
21. 消防会館前、講中名なし鹿折消防会館（屯所）。本浜町1丁目、2丁目の行政委員が世話役。1丁目の行政委員は加藤信夫氏（総代も兼務）と伊藤克人氏。しかし、伊藤氏は津波で亡くなる。2丁目の委員は小野寺清喜氏である。
22. 飯綱神社前、飯綱会館。浪板1区の住民、浪板1区の御仮宮と呼ぶ。
23. 浪板2区公会堂、浪板2区の住民、御仮宮。（22）の飯綱会館同様、浪板地区のオヤドは、それぞれの地区の神社である飯綱神社、須賀神社への八雲神社の巡幸を意味するので、御仮宮と呼ばれる。浪板地区がオテンノウサマの際に回るようになったのは、明治時代に起きた流行病がもとで、それ以前はオテンノウサマのルートには組み込まれていなかった。この前の浜から船を仕立てて鹿折川対岸ヤヨイ食品工場前の岸壁へ神輿乗せ船をつける。以下は西側の岸。
24. 菅野家前、菅野明雄（宇屋）、宇屋講中。
25. 伊藤家前、伊藤信子（蛇石）、蛇石講中。
26. 鹿折唐桑駅前。行政委員や自治会長が世話人となっている。

27. 白山商店前、白山講中。神輿を車に乗せ白山商店まで持っていき、ゆるんだ綱を締め直すなどして化粧直しを行う。
28. 斉藤家前、斉藤久夫（仁井屋：齋藤久夫氏は総代）、仁井屋講中。
29. 斉藤家前、斉藤洋（東：別当）。羽黒修験の東光寺帰命院玉泉坊から数えて17代目。八雲神社へ。



写真1 八雲神社別当とともにオサガリのオヤドを確認する。



写真2 18～21のオヤドは、もともと塩田だったところを埋め立てた町だった。津波で甚大な被害を受けた。



写真3 かつて鹿折駐在所があった敷地。



写真1 明治41年「八雲神社道順図」の封入されていた封筒（齋藤洋氏蔵）

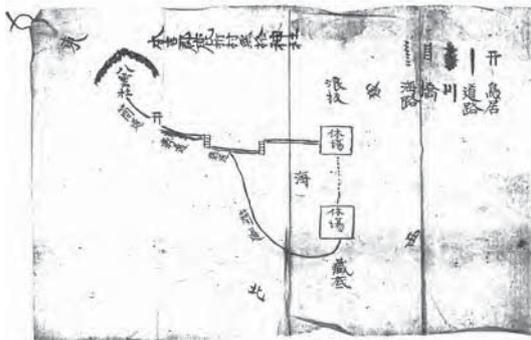


写真3 神輿渡御道順図（齋藤洋氏蔵）

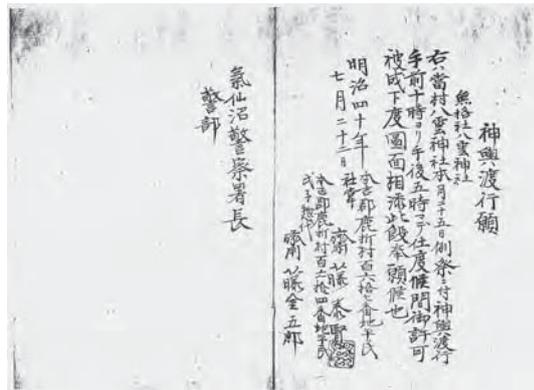


写真2 「神輿渡行願」社掌齋藤泰賢、氏子惣代齋藤金五郎名、氣仙沼警察署長宛（齋藤洋氏蔵）

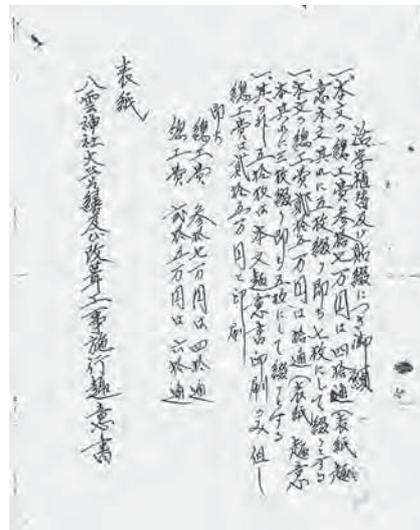


写真4 「八雲神社大宮繕及び改葺工事施工趣意書」（一部表記の差し替え指示あり、齋藤洋氏蔵）（その1）



写真5 「八雲神社大宮繕及び改葺工事施工趣意書」（一部表記の差し替え指示あり、齋藤洋氏蔵）（その2）



写真6 「八雲神社大宮繕及び改葺工事施工趣意書」（一部表記の差し替え指示あり、齋藤洋氏蔵）（その3）